

令和 7 年度 園評価書

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A : よくできている B : 概ねできている, C : あまりできていない, D : できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取り組み目標等)
心豊かな たくましい子	自分でやってみよう 友達とやってみよう	・子どもが園で安心して生活し、思いや要求を自分なりに表現している	○子どもの思いや感じたことを受け止め、話を聞いたり一緒に考えたりすることで、どの職員にも安心して自分の思いや要求をことばや仕草で伝えている ○異年齢の友達とも関わって遊ぶことを楽しんでいる ○朝の会で今日の予定、帰りの会で明日の予定を伝えることで、見通しをもって安心して生活している ○登園すると「今日は〇〇しよう」と友達と相談し、やりたいことを自分たちで進めている	A	A	・園児の表情から、安心して自己を発揮していることがよくわかる。その背景には、保育者の園児一人一人を大切にしようとする姿勢が、園児に伝わっているからであると思う。また、保護者との良好な関係を築き上げようとする姿勢も、園児の安心感につながっていると思う	・子どもが安心して園生活を送るためには、保護者が安心して子どもを預けられる園であることが基本にある。保護者との信頼関係を築いたうえで、子ども一人一人の思いに寄り添った関わりをしていく
		・子どもが“～したい”という思いをもち、“やってみよう”と自ら動き出し意欲的に遊んでいる	○「これやりたい」「おもしろそう」という表現の仕方は様々だが、一人一人の思いに寄り添い、さらに必要な教材や道具を用意したことで子どもが自ら遊ぶようとする意欲につながっている ○まだ大人に頼ろうとする姿はあるが、年度当初に比べて減り、やってみようとする姿が増えてきている。 ○自分でやってみて難しいと感じると一度は大人に声をかけるが、すぐに手助けせず見守ったりヒントになるような言葉をかけたりすることで、自分でやってみようとしたり、友達と一緒に考えたりする姿につながっている ●子どもが“こうしたい”と思っても、うまく行動にうつすことができない時もあった	B	A	・園児の遊びに向かう姿勢から、「やってみよう」「してみよう」という意欲的な姿勢をみることができる。保育者が、「指導者」+「ファシリテーター」としての役割を、園児の実態や場面に応じ、柔軟に使い分けていることが、意欲的な姿勢を生み出していると思う	・まず、子どもがやってみようと思う環境を用意すること、そして動き出すまでに援助が必要な場合は、いつ、どのタイミングで、どのように関わることか、具体例をあげながら話し合い見極める力をつけていく
		・友達と関わることを喜び、自分の思いや考えを伝えるとともに、相手の思いにも気づく経験ができている	○保育者が仲立ちのタイミングを考えることで、相手にも思いがあり、自分とは違う考えがあることを知る、気づく経験はできている ○自分の思いを主張しながらも、相手の思いに気づく経験を重ねることで相手への思いやりが少しずつ育ってきている ○少人数での自然な異年齢の関わりの中で、小さい子の様子の変化に気づき、「どうしたの?」とやさしく声をかける姿がある ●友達と話し合う姿が増え、自分の思いや考えを伝え合うようになってきているが、自分の気持ちに折り合いをつけることは難しい時がある ●言葉でうまく表現できず手が出しまったり、チクチク言葉を言ってしまったりなど相手が悲しい気持ちになってしまうことがある	B	B	・園児数が少なく、大人との関わりが多くなりがちのため、友達と関わる場の設定、保育者の位置などを考え配慮していく。自身の思いを受けとめてもらう経験をかさねることで、相手の思いに気づき折り合いをつけることにつながっていくため、まず思いを受け止めること、そして、相手の思いを伝えることを繰り返していく	

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取り組み目標等)
1 こども園における 教育及び保育	(1)0歳から小学校 就学前までの一貫 した教育及び保育	・発達連続性を考慮し、一人一人の発達や経験の差を把握、理解した上で、学年目標に向けた教育保育を実践している	○今年度は年少、年中児が同じ保育室と一緒に生活したが、それぞれの発達や経験の差に応じて援助する視点や方法を考え関わることで、一人一人の成長へとつながることができた ○学年だけでなく異年齢の関わりの中で刺激を受けたり、伝え合ったりするなどの姿があり、異年齢のなかでの育ちも見られる ○子ども一人一人の発達や興味関心があるものを把握し、月案、週案、を立てている。子どもの人数に対して大人が多く大人に頼りがちになってしまう環境にあるため、就学も見据え子ども同士がつながるよう、大人が関わりすぎないように意識し保育している	A	A	・園児一人一人の特性を理解し丁寧に対応されている ・少人数のメリットを生かし異年齢交流を実施することは、多様な価値に触れる良い機会となっており、引き続き「多様な他者」と関わる機会を大切にしていきたいと思う	・一人一人の発達、特性を把握、理解し、その子に沿った援助、関わりをしていく ・異年齢児と共に同じ保育室で過ごすため、学年の育ちをおさえたと上で異年齢保育の良さを活かして子ども同士の関わりを見守っていく
	(2)一日の生活の連 続性及びリズムの 多様性への配慮	・子どもが安心して園生活を送ることができるよう、1号認定児と2号認定児の生活のリズムの違いを踏まえた配慮がなされている	○2号認定児が安心して午睡時間を過ごすように保育室を分けるなど、午後の活動は1号認定児と2号認定児の生活のリズムの違いを保証する生活環境が用意されている ○2号認定児がスムーズに午睡に入れるよう、日々動線を考えている ●1号認定児降園時はお知らせするボードを活用し、声の大きさに気を付けるよう職員だけでなく保護者にも伝えているが、声が大きくなってしまふことがある	B	A	・1号認定児のお迎えの時の声が大きくなってしまふのは仕方ないことなのではないか ・2号認定児がさみしい思いをしないようという保育者の思いが適切に伝えていると思う ・帰りの時間のことでなく、普段の保育の中での多様性ととらえれば良いのではないかと	・1号認定児は早く降園するため、その際2号認定児がさみしい思いをしないよう午睡を奥の部屋でするなど配慮する ・異年齢児と共に過ごす環境を用意し、家庭的な雰囲気の中で過ごすことができるようにする
	(3)環境を通して行 う教育及び保育	・子どもが、“やってみよう”と自ら関わり、様々なことに気づき、考えたり試したりすることができる環境が構成されている	○遊び展開図で子どもたちの遊びを予想し、物の配置や種類を日々試行錯誤し、興味に沿った環境を室内外につくっている ○様々な素材、道具を子どもが自由に持ち出すことができる場に用意し、子どもたちが自ら選ぶことができる環境をつくっている ○子どもからの発信を一緒に形にしていくことで、よりイメージが具体的に、「もっとこうしたい」という意欲につながっている ●秋の自然物は子どもたちの興味が向かず、環境作りが苦戦した ●素材が同じものになりがちなので幅が広がるようにしていきたい	B	B	・子どもたちの1つ1つの遊びに対して十分考えて環境をセッティングしていると思う ・秋の自然物の遊びの環境がうまく作れなかったという反省を今後を生かしていってほしいと思う	・子どもたちの発達、興味関心をとらえることがまず第一。そこから環境を考え構成するが、子どもの遊びの様子を見ながら何をどこに足すのか、または引くのか…。再構成する力が必要となる
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	・様々な災害を想定した訓練を実施し、課題を明確にシ次にしている ・ヒヤリハットの記録、伝達を実施し、事故を未然に防いでいる	○毎月、様々な災害を想定した訓練を実施している(火災、地震、地震→火災、土砂災害、浸水洪水災害) ○年3回、不審者訓練を実施している ○『土砂災害警戒区域』『洪水浸水警戒区域』であるため、大雨が降った際の対応について職員間で確認し合っている ○地震の揺れを体験できる『ユレタ』を活用し、園児だけでなく保護者にも体験の機会をつくり、地震発生時の安全な体勢を確認した ○小さなことでも危険と感じたことはヒヤリハットに記入し職員間で共有している	A	A	・災害や不審者訓練の実施、『ユレタ』を活用するなど、実際にやってみて改善していくというところが良いと思う	・土砂災害警戒区域であり洪水浸水想定区域でもあるため、常にその危険があることをどの職員も理解し非常時に備えなければならない。また地震に関しては、どの程度の震度を想定するのかを決めて行い、子どもたちに自らの身を守る方法を伝えていく
	(1)健康教育の充実	・生活習慣の自立に向け、家庭と連携を図り、一人一人に沿った援助をしている ・食育活動を通して食への関心を高めている	○生活習慣の自立に向けては、園での様子、家庭での様子を伝え合いながら一人一人の状態に合わせ無理のないように援助しながら進めている ○今年度は、年長児がお茶摘み体験やお茶の入れ方教室に参加し、地域の特産に興味を持つことができ、実際に急須でお茶を入れ年下児に振舞う経験もできた ○毎月の食育活動の内容をわかりやすく玄関に掲示し、保護者にも食に興味をもってもらえるような取り組みをしている ○子どもたちが育て、収穫した野菜を使って、クッキングを行っている ●食への関心、意欲が少ない子が多いため、食育活動や楽しい食事時間の経験を重ねることや“少し食べてみようかな”と思えるような働きかけが必要である	B	A	・子どもたちが野菜を栽培し、それを収穫してクッキングをする体験もできている。食育の日の玄関の展示があり、保護者が見てもわかりやすい。食への関心、意欲は個人個人でだいぶ変わらなうと思うので園全体の評価としてはAで良いと思う	・生活習慣の自立に向けては、園だけではできないことであるため、保護者と連絡を密に取りながら無理のないように進めていく ・実際に野菜を育て収穫し、調理して食べる経験は、何よりも子どもへの食への意欲につながるため来年度でもできるだけ多く取り入れていく
4 特別支援教育・ 保育	(1)支援体制づくり の推進	・一人一人の発達、特性を把握した上で支援計画を作成し、保護者面談を実施、職員の共通理解のもと支援している ・関係機関との連携を図っている	○毎月のケース会議において、一人一人の発達、サポート内容を伝え、職員全体で共通理解のもと支援することができている ○3か月に一度サポートプランを作成し保護者との面談実施、保護者の理解のもと支援を行っている ○就学に向けては、面談を実施する中で保護者の意向を確認し、必要であれば専門調査につなげている ○園児が通っている児童発達支援事業所との連携を図り、園での園児の様子を見てもらったり、支援の方法を情報交換したりし、より良い支援につなげている	A	A	・特別支援児一人一人のサポートプランが立てられ、保護者との面談、職員間の共有もできている ・外部の機関との連携もとれているので、小規模の良さを生かしながら今後も続けていってほしい	・特別支援児の育ち、支援の方法については、職員皆で共通理解し取り組んでいくことができるよう会議に出られない職員にも丁寧に伝えていく ・保護者との面談を実施し、保護の疑問や悩み丁寧に対応し、保護者の理解のもと園での支援を行っていく
	(1)組織体制の充実	・一人一人の力が集まり大きな力となって園を運営していくという自覚をもち、自分の役割を果たしている ・他の分掌の内容も知り協力し合っている	○自身のやるべきこと、役割を果たしている ○自身の分掌だけでなく、他の分掌の事も気にかけて自分事として内容を理解し、協力していくことで園全体の業務を円滑に進めていくことができる ○級外であるが、園全体の動きを常に意識し、園運営に携わることができている ○今年度は、職員が足りない中、皆で協力して園運営を進めることができた	A	A	・限られた教職員の中で、教育課程をまわすことは難しいことだと思いが、園長を中心にチームとして教育活動に向かっていることが、参観した様子からよく分かる ・小規模の園では、在籍期間中、同じ分掌を複数年担当することで少しだけ職員の負担が減るかもしれない(引継ぎを考えると課題もあるが)	・職員が少ないため一人が背負う分掌の量は多い。やらなければならない仕事内容を打ち合わせノートに記入し、他の職員も今何をしなければならないのかわかるようにし、協力し合えるようにする
6 研 修	(1)研修体制の充実	・研修テーマ『“やってみよう” “こうしてみようよ”を支える援助』に沿って園内研修を行い学びを教育保育に活かしている	○研究保育を各学年1回行い、研修テーマに沿った事前、事後研修を通して職員皆で振り返り、次の教育保育に活かしている ○研究保育では、自園の職員だけでなく他園の職員や小学校の先生からの視点での意見もいただくことで、自分たちの教育保育を客観的に振り返ることにつながっている ○遊び展開図で子どもたちの遊びの流れを予想し環境を用意しているが、予想と違う場合も子どもの思いに沿った環境を目指し、職員間で話し合い再度環境を工夫してつくっている	A	A	・自然豊かで良いが、蜂もいて、何が起るかわからないので、小さな気づきを迅速に共有することは大切だと思う ・鳥の鳴き声がとてもよく聞こえる。そんな自然環境も教材の一つになるのではないかと	・常に研修テーマを意識し、教育保育を実践する ・各クラス1回以上研究保育を実施し、他園や小学校の先生にも参観してもらい、様々な意見から自園の教育保育を客観的に振り返りその後を生かす。
	(1)教育・保育環境 の充実	・常に安全な環境の中で子どもが生活することができるよう、安全点検を実施し、危険箇所の把握、修繕を行っている	○毎日の早番点検、遅番点検で異常があればすぐに報告、危険箇所を職員間で共有している ○各クラスでは毎週安全チェック、消毒チェックを行っている ○井戸水のため、毎日の塩素濃度の測定、塩素のタンクの確認を行い、飲み水が安全であることを確認している ●自然に恵まれている一方で、サル、蛇などの危険リスクへの対応が難しい	A	A	・自然豊かで良いが、蜂もいて、何が起るかわからないので、小さな気づきを迅速に共有することは大切だと思う ・鳥の鳴き声がとてもよく聞こえる。そんな自然環境も教材の一つになるのではないかと	・毎日の早番、遅番点検を確実に実施する。野生生物がいた形跡、蜂の巣などがないかも確認する ・危険箇所についてはすぐに職員に周知し、修繕できるものについては修繕する
8 家庭との連携・ 協力	(1)家庭教育への支 援機能の充実	・園での子どもの姿を毎日の配信や、お便りの配信で保護者に伝えている ・日々の伝え合いや保育参加会、面談を通してより良い信頼関係を築いている	○毎日の子どもの様子を降園時に保護者に伝えると共に、写真や文章でコドモンでも配信している ○園日より、クラスだより(月のねらい、保育の内容、子どもの様子を載せている)を毎月コドモンで保護者に配信している ○保護者懇談会年1回、保育参加会年2回実施し、園での子どもの様子を見てもらうと共に、子どもと一緒に遊ぶ楽しさを感じてもらおう内容を考え実施している ○学期ごとに保護者との面談を実施、子どもの成長を伝えあうと共に、保護者からの悩みを丁寧に聴き一緒に考えることで保護者の不安が少しでも解消されるよう対応している	A	A	・毎日コドモンで園の様子を配信してくれるので、今日何をしたのかわかりやすい。お便りも配信され、月のねらい、保育内容、行事予定、持ち物も事前にお知らせ、助かっている。学期ごとの面談も一人一人丁寧にやってくれている	・日々の子どもの様子、お便りの配信を引き続き実施する ・懇談会、面談、など保護者と実際に話ができる機会を作り、保護者の話を聴くことを大切にし、信頼関係を築いていく
	(1)近隣の園との連 携の推進	・公開保育を行うと共に、小学校の公開授業や他園の公開保育を参観して交流を行い、近隣校、園との連携を深めている	○公開保育には他園の職員、小学校の先生が来園、自園から南蕨科小学校の授業参観、他園の公開保育に職員が参加させてもらった ○南蕨科小学校5年生との田んぼの泥んこ遊び、書初め展見学など小学校との交流の機会を作っている ○清沢こども園、中蕨科こども園との交流を実施し、一緒に遊ぶ経験ができている。また、交流の前にiPadのフェイスタイムをしてお互いの顔が見えるツールで遊びの予定を立てることも行った	A	A	・小学校に行く機会が何度かあったり、近くに園がない状況でも他園との交流や、iPadを使った交流を取り入れるなど、かなり頑張ってくれていると思う。小学校に行くと、顔を覚えてもらうだけでも子どもにとってとてもプラスになると思う	・小学校は園児が徒歩で行くことができるため、学校見学や交流をお願いし訪問の機会を増やしていく ・職員は、授業参観、公開保育での交流を続ける ・近隣園または、タクシー利用となるため、主に交流のためにタクシーを使うような計画を立てていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づ くりの推進	・地域の方との触れ合いを大切に地域に根差した教育保育を実践している ・地域の未就園の親子が交流を持てるようおしゃべりサロンを開催している	○園周辺の散歩では、芝桜、田んぼ、茶畑を見せてもらったり、鯉の餌やりをさせてもらうなど地域の方との触れ合う機会をもつことができている ○老人ホームの大道芸スモールパーティーに招待してもらったり、地域の敬老会や吉津園にビデオレターを届けたり、交流のある施設や近隣の方に子どもたち手作りのカレンダーを届けたりなど、近隣施設との交流を図っている ○毎月おしゃべりサロンを開催し、歯科衛生士、保健師等のお話や体操、リズム、観劇等のイベントもとり入れ、地域の未就園の親子が楽しく参加し交流できる場を提供している	A	A	・おしゃべりサロンに来てくれた子が、入園につながると良いと思うが、参加者が少ないとなかなか難しいのかもしれない ・地域への散歩にもたくさん出掛けしてほしい	・中蕨科こども園での茶摘み体験、園周辺散歩での芝桜見学、鯉の餌やり、田んぼや茶畑見学など地域とのつながりを今後も引き継いでいく ・おしゃべりサロンの参加者が少ないため、今後も地域のお便りへの掲載を続けるとともに、保護者、地域の方へ声をかける